



## 長崎ランタンフェスティバルと古今中国 —中国人観光客誘致への示唆—

国際東アジア研究センター協力研究員 彭 雪

長崎のランタンフェスティバル（灯会とも呼ぶ）にずっと前から憧れていた。今年2月4日と5日に、念願の旅がようやく実現した。たった2日間の滞在だが、様々な感想を持った。以下、これをエッセイの形で記述する。

### 1. 長崎ランタンフェスティバルと華僑

ランタンフェスティバル期間中、長崎の街中はあちこちでランタンが飾られていた。夜になると、街はライトアップされ、明るく幻想的な美しい風景となった。大勢の観光客が集まり、喜びに溢れる表情でランタンを楽しんでいた。静かに流れている川の上に、提灯の光が綺麗に映し出され、まるで水面下でも盛大な行事が行われているようであった。その世界は地上のものよりずっと静かで美しかった。一瞬、自分が唐時代の長安、あるいは南北朝時代の南京にいるような錯覚を起こした。

長崎のランタンフェスティバルは、地元住民の伝統の祭りの1つである。しかし、ここの住民の多くは、実は華僑である。フェスティバル期間中に行われる龍踊り・雑技・皇帝パレード等のイベントも、ほとんど中国に関連している。けれども、現在ではランタンフェスティバルは「長崎の風物詩」だといわれている。それほど長崎市と中国の関係が深いことに気づいた。

ランタンフェスティバルは1987年から始まったといわれている。もともとは新地中華街の華僑住民たちが旧正月を祝う「春節祭」であった。新地商店街の範囲内で行っていた小規模の祭りであっ

たが、1994年に長崎市の冬季観光振興策に取り込まれ、市の協力をえてランタンフェスティバルとして拡大開催されるようになった。期間も延長され春節（旧暦1月1日）から元宵節（旧暦1月15日）までの15日間となった。それ以来、日本各地および海外からの観光客を引き寄せ、現在でも祭りの規模は拡大し続けている。会場の1つである孔子廟をランタンフェスティバルのために使用し始めたのは2年前からである。

長崎の日中交流の歴史を調べてみたところ、当地の中華街の歴史は日本最古であることが分かった。規模は横浜と神戸の中華街より小さいが、歴史は長崎の方が長い。最初に中国人が長崎に渡来したのは1562年だとされている。その後、貿易のために頻繁に船が来航するようになり、長崎に在住する中国人も増えた。さらに、1635年、徳川幕府が長崎以外での中国貿易を禁止したことによって、九州各地から中国人が長崎に移住し、長崎の中国人住民の数は一層増えた。1670年代、長崎の人口約6万人のうち、6分の1の約1万人が中国人であったとされている<sup>(注1)</sup>。長崎の中国人社会が最も繁盛していた時期であろう。

しかし、1859年以降、日本の開国によって、長崎以外でも神奈川（横浜）をはじめ、多くの港が開港した。長崎の対外貿易唯一の窓口という地位がなくなり、中国人が長崎に集中する状況が変化し、その人数も大幅に減少した。1930年代半ばまでは数百人程度しかなかった<sup>(注2)</sup>。現在、長崎市の人口約44万人（平成24年1月1日の推定人口）（長崎県ウェブサイト）に対し、留学生を含

めた中国国籍の住民の数は4,037人（2010年）である（入国管理局ウェブサイト）。帰化して日本国籍になった華僑を含めると、中国系の人口がそれ以上になるが、正確な数字は把握できていない。現在、長崎華僑協会が華僑の人口等の調査を行っているところである。

華僑総会によると、現在長崎に在住している中国系住民のうち、約9割は福建系とのことだ。歴史上（明治以降）長崎の中国人社会には3つのグループがあった。福建、三江<sup>(注3)</sup>、広東の3系統で、それぞれ福建会館（1869年設立）、三江会館（1878年設立）、広東会館（1869年設立）という商工団体を組織した。1907年には、3つの商工団体をまとめる長崎商務総会も設立され、江戸時代以来の伝統的な華僑社会は継続的に発展の様相を示したのである。長崎の中国系住民が主に福建系になったのは20世紀の戦争と政治の動きの影響を受けた結果だと考えられる。最初は1930年代から始まった日中戦争によって、貿易商は経済的打撃を受け中国への引き揚げが相次いだ。さらに、1945年に長崎は原爆投下を受け、決定的なダメージを負ったため、大勢の華僑貿易商は中国に帰った。そして、戦後の日中関係の正常化が遅れ、長期間日中貿易が断絶していたことで、彼らが長崎に戻ることはなかった。その結果、戦後の長崎華僑は、従来から行商や飲食業で生計を立てていた福建系の人々が大部分を占める状況となった（藤井、2010）。

長崎華僑には日本社会と積極的に融合し続けてきたという特徴がある。16世紀から日本人との通婚があった。話を伺った華僑総会の副会長は、福建省出身の中国人4世の男性だが、すでに帰化して日本国籍を取得していた。日本語が母語になり、中国語より流暢であった。中国人っぽい名前もっているが、発音は日本の読み方にしている。話を伺うと、日本社会一般に見られる人口減少と若

者の大都市への移住問題などは、長崎の華僑社会でも起こっているとのことであった。

旅先で出会ったおばあちゃんは中華街のお店についてこう語った「（この灯会の期間中に）1年の半分の利益が入らないと、お店が成り立たないのよ」。おばあちゃんは感覚的にいっているが、平日の中華街が寂しい風景であることは想像できる。今後、華僑人口の更なる減少は、華僑社会と灯会にも不利な影響をもたらすであろう。観光客誘致政策をとって非在住人口を増やすことが、地域の活気を保つ1つの道である。

## 2. 長崎ランタンフェスティバルのイメージ：中国灯会との比較について

とても素晴らしいお祭りの中、1番印象に残ったのは、日本に居ながら中国風情をたっぷりと味わえることである。会場では、龍踊り・雑技・獅子舞・皇帝パレードなどのイベントから、豚の頭を祭った台・ランタン・提灯・旗などの飾りまで、全てにおいて伝統的な中国風の雰囲気漂っていた。

しかし、これらの風景は私が生まれ育った中国のイメージとは少し違う気がした。ランタンフェスティバルの会場を彩っているのは、欧米・香港の映画でよく見る「昔の中国」のイメージなのである。一般的に人々が「伝統的な中国風」と感じる典型的な要素をできるだけ多く集め、観光客の目の前で一堂に公開することで、雰囲気を盛り上げていっているのである。それは確かに「中国らしい」ものではあるが、現在、中国各地で開催されている同様のイベント「元宵節」の「灯会」とは、はっきりとした違いがある。その違いとは、具体的に以下の2点である。

第1に、長崎ランタンフェスティバルのランタンは、主に伝統的な特色をもったモチーフで作られているのに対し、中国灯会のランタンには、現代の要素を取り込んだデザインも沢山あり、伝統

的なテーマを表現する場合においても、幾何学模様や動物、植物などの形のランタンに、大胆に現代的なアニメ風のデザインを使っている。例えば、「猿候捉月」,「守株待兔」等の物語は伝統的なテーマにもかかわらず、使ったキャラクターはとてもかわいく、現代アニメ風になっている。

長崎灯会を見ながら、中国の西安で見た唐代歌舞を思い出した。西安は中国の中でも、長い歴史をもつ伝統的な都市である。国内外の観光客を誘致するために、史実と民間伝説を源として、斬新な形の唐代歌舞を創作した。それは唐代のままではなく、現代人の観賞にも耐え得る新たな創作である。中国は時代の変化と市民のニーズなどに合わせて、革新的な表現を追求しているのである。

逆に、長崎においては、「中国の伝統的な特色」を全面に出すことが、セールスポイントになるともいえる。ランタンフェスティバルが、この時季の長崎において、国内外から観光客を誘致する目玉イベントになっているといっても過言ではない。そのため、長崎では、今まで親しんできたランタンフェスティバルの特徴や、伝統的な中国風文化の表現を変えることに対して慎重な態度をとっている。つまり、長崎では「伝統」を極める道で進んでいるのである。

第2は、日中のお祭りの背景の違いによるものである。中国灯会における特色として、よく時代を謳歌する作品が展示されており、当地の繁栄を讃える言葉が大きな文字で書かれ、ランタンの飾りと一緒に光り輝いている。長崎の華僑の9割は福建系なので、同じ福建省の厦門（アモイ）の今年のランタンフェスティバルを例とすると、「龍騰九州・春滿兩岸」<sup>(注4)</sup>を主題として、「輝煌三十年」<sup>(注5)</sup>、「盛世中華・魅力厦門」<sup>(注6)</sup>などの文字を付けたランタンが展示されていた。しかし、長崎では時代・繁栄を賛美する言葉は全くなく、今回多く書かれていたのは、東日本大震災を受けて

の「がんばれ日本」の応援の言葉であった。時節柄、ということもあるが、こうしたイデオロギーの影響の有無が、中国と日本の祭りの全体的な違いでもある。中国の祭りの主催者は基本的には行政なので、政治色が濃厚である。日本の祭りは市民を主体にしているため、市民参加の度合いが強く（例えば、市民団体の出演が中心であることや、公募制の市民ボランティアの参加など）、政治的宣伝とは全くかかわっていない。

結果として、同じ「灯会」であっても、中国のもの比べ、長崎のそれはより「伝統的な中国風」を演出した特徴をもっており、現代中国灯会とは、はっきりと区別されるものであるといえる。

以上の2点以外、細かい違いも幾つか気がついた。例えば、文字（或いは記号）の使い方、食べ物の名前などにも異なる特徴がある。

### 縁起の記号—「囍」の使い方

例えば、長崎で、よく「囍」の記号が描かれた三角の旗を見た。赤い提灯と「熱烈歓迎」と書かれた旗とともに街を飾り、ランタンフェスティバルらしい雰囲気醸し出していた。

しかし、最初にそれを見たときは「え?」と思った。この記号は現代の中国では結婚式でしか使わないからである。よく「囍」とされているのだが、実は文字「囍（喜喜）」の変形である。切り





紙で簡単に作れるように、下の部分が微調整されたのである。「囍」の語源を調べると、中国で明清のころから流行っていたもので、2人の喜びを端的に表現したものである。また宋代の王安石まで遡るといふ説も広く受け入れられている。王安石が「結婚」と「試験に合格」の二重の喜びを手に入れた時作った文字だと言われている。とても縁起のいい文字であるが、現代の中国では結婚式でしか使わない。新春の喜びを表す文字は「囍」ではなく、「禧」を使うのである。

しかし、なぜ長崎で「囍」は新春のお祝いを表す記号になったのか。華僑総会の副会長はこれについてこのように語った。「『囍』は長寿を祝福する意味があるのですよ。誕生日の時、1本の長い麺を食べる風習があるでしょう。その点から、麺を販売しているちゃんぽん屋さんでよく『囍』の紙を張っていました。中華街の春節祭りがランタンフェスティバルに拡大された際、その文字を取り入れて、新春のお祝いにも使うようになったのです」。昔の中国でも「囍」には長寿を祝う意味があったのであろうか。この点にはまだ疑問が残っているが、今後とも、日本における「囍」は新春を祝う際にも使える記号として定着していくであろう。中国灯会との違いの1つとして、長崎ランタンフェスティバルを彩っていく。

### 「饅頭」か? 「包子」か? — 「肉まん」の呼び方

中華料理の名物である肉まんを売っている店を中華街で見かけた。店の看板の上に「肉包子」という文字が大きく書かれている。そばに小さい文字の「にくまん」が記されている。この単語「包子」を見て、とても親近感がわいた。写真のような具のある食品について、中国で馴染みの呼び方は「肉包子」である。逆に、具のないものは「饅頭」と呼ぶのが一般的である。しかし、日本における通称の「〇〇マン」は「〇〇饅頭」の略称であり、具のあるものを指す。コンビニや中華まんのお店で看板を見る時、いつも「これは饅頭じゃない。包子だよ」といいたくなる。

しかし、歴史を探ると、私の認識に反して、最初に「饅頭」と呼ばれたものは具があるものことだと分かった。三国時代の諸葛亮が南蛮征伐の際（西暦225年）、南蛮<sup>(注7)</sup>の人頭を祀るという風習の代りに、人頭の形の食品を作った。その食品の名前はもともと「蛮頭」であったが、後世に伝わる過程で変化が生じ、同じ発音の「饅頭」と名付けられた。この名前の変化は宋代の「事物紀原」、清代の「談征」、明代の「七修類稿」などの歴史記事に掲載されている。つまり、現在の中国では具のある食品を「包子」と呼ぶようになっているが、昔は「饅頭」で通じていた。現在でも、具のあるものを「饅頭」と呼ぶ習慣は浙江省、江蘇省、上海市の一部の土地で残っている。

饅頭が日本にやってきた歴史については、2つの説がある。一説では1349年（中国南北朝）に禪



宗の僧と一緒に中国から入ってきたといわれている。他の説では、1241年に南宋に渡り学問を修めた日本人僧侶が中国で饅頭の製法を学び、その後福岡で広げたというものである。

どちらにしても、日本にやってきてから、具のある食品が「饅頭」だと分かった。カレーまん・ピザまんなどの新しい具を使い始めたり、九州では酢醤油をつけて一緒に食べたり等の変化があったが、「饅頭」という呼び方が残され、略されて「〇まん」になっている。

長崎で見かけた看板には「にくまん」とともに、「肉包子」という名前が一緒に載せられている。昔と今の中国が奇妙に混在しているような気がして、とても不思議に思った。

このように、長崎で見つけた中国的要素には、その文化の伝播ルートと経緯が垣間見える。文化伝播と継承の過程で、必ずしもそのままの形で伝わっていくわけではないことが分かった。文化は伝播先で変化していく可能性もあるが、発祥地で変化が起こり、伝播先では元のまま残ることもある。

総合的にみると、日本は中国より、伝統を守ることにより重きを置いている。そのため、日本の方が中国の昔の文化をよく保存している。このような特徴に着目して、古今中国の違いを探し出すことは、今後中国人観光客向けの観光資源開発に繋がるのではないだろうか。

### 3. 長崎を訪ねた中国人観光客の現状

来日中国人観光客の研究に興味をもっているため、長崎にいる時も、その現状について調査した。

長崎市が発表したランタンフェスティバル15日間の集客は約77万人であった（昨年より8万人減）。集客数が最も少なかったのは積雪が観測された2月2日（約1万人）で、最も多かったのは歌手で女

優のジュディ・オングさんが皇后役を務めて皇帝パレードを行った2月4日であった（約16万5千人）（長崎新聞、2012年2月7日）。この観光客の国籍について、公表統計はないが、個人的観察からいうと、日本人が圧倒的に多く、韓国語を話している観光客もしばしばみかけた。しかし、2日間にわたった旅の中、中国人観光客とは1人も出会えなかった。

各観光スポットおよび観光総合案内所の受付係に聞いた結果、中国人観光客も来ているようである。はっきりした数字はないが、大まかな数字は「興福寺」と「長崎歴史資料館」のスタッフによると、1日団体1つ（約20人）程度の中国人観光客が訪れている。観光総合案内所で中国語版のパンフレットをもらった客数を数えるのも方法の1つであるが、スタッフによると、「中国人はよく英語でしゃべるから、英語のパンフレットを渡す場合もある」のため、同じ東アジアにある韓国からの観光客より、把握しにくいのである。

中国人観光客の人数は統計データにも反映されている。平成22年における、長崎市の中国人延べ宿泊客実数は、6,912人と記録されており（市全体で延べ宿泊客実数は109万7,700人、うち外国人11万108人、長崎県観光振興推進本部、2010）、日帰り客を含めても、1日に数十人程度しかいないのである。この状況は、ランタンフェスティバル期間中もあまり変わらなかった。十数万人の人出で賑わったお祭りの現場に中国人観光客は意外と少なかった。個人的には長崎ランタンフェスティバルはとても面白いと思ったのに、中国人観光客は何故来なかったのだろうか。

長崎は、中国やオランダ、ポルトガルなどとの長い交流の歴史、被爆都市としての核兵器廃絶と世界恒久平和運動の発信地、海や緑といった豊かな自然など、色々な観光資源をもっているが、ここでは、長崎の華僑に関する観光資源に絞って、

中国人観光客への魅力を考えてみた。現在の中国人にとって、海外観光の主な目的は見聞拡大であり、有名などころに行きたがる傾向がみられる。海外の観光地を宣伝する際、中国の観光広告はよく「最も」という言葉を使っている（彭，岸本，2012）。ユニークで特徴的な観光地は中国人観光客に人気がある。長崎は「最も」長い歴史のある中華街として、日中貿易の歴史、孫文をはじめ中国著名人との深い絆、唐寺・孔子廟などの文化施設や伝統的な灯会イベントなどがあり、それらは貴重な観光資源として利用できると考えられる。

もともと日本における華僑文化に興味をもっている中国人観光客にとって、長崎は見逃せないところになるであろう。しかし、一般的な中国人観光客の心理からいえば、「せっかく海外に行くなら、当地らしい風景を見たい。中国風なら、中国で見ればいいでしょう」というところがある。このような観光客に対して、長崎はどう対応すればいいであろうか。前述したように、長崎は「伝統的な中国風」という特徴をもっており、現代中国とはかなり違いがある。「中国では味わえない、伝統的な中国風」の雰囲気や強調してアピールすれば、中国人観光客にとって魅力的な観光地であることが伝わるのではないだろうか。

## 注

- (注1) 唐人屋敷の展示資料による。
- (注2) 兪（2002）によると、長崎に住む中国人の数については、1868年が743人、1871年が447人、1880年が549人、1912年が約900人、1935年ごろが約1,000人とされている。
- (注3) 三江とは、浙江、江蘇、安徽、江西などの地域を指す。他に、「江南、江西、浙江を指す」という説もある。
- (注4) 「中国全土は活気のある龍の年を迎える。本土

と台湾を含める兩岸にも春が訪ねてくる。」と言う意味である。ここでの「九州」は、古代から伝承してきた言い方で、中国全土を示す。

(注5) 「三十年の発展によって著しい成果を達成できている」と言う意味である。

(注6) 「中国は盛世であり、厦門は魅力的である」と言う意味である。

(注7) 古代中国では「南蛮」で、南方民族のことを示す。

## 参考文献

- 長崎県観光振興推進本部（2010）「平成22年市町別観光客数」（[http://www.pref.nagasaki.jp/toukeidb/jyouhou\\_kou-kai/top\\_frame](http://www.pref.nagasaki.jp/toukeidb/jyouhou_kou-kai/top_frame)）
- 長崎県ウェブサイト（<http://www.pref.nagasaki.jp/>）
- 長崎新聞，2012年2月7日付け（<http://www.nagasaki-np.co.jp/kiji/20120207/01.shtml>）
- 入国管理局ウェブサイト（<http://www.immi-moj.go.jp/>）
- 藤井久美子（2010）「21世紀の長崎華僑華人をめぐる新たな動き—時中小学校の変遷を中心とする一考察—」『宮崎大学教育文化学部紀要人文科学』第22号，pp. 1～7
- 彭雪，岸本千佳司（2012）「中国における旅行広告と記事内容上の日本観光イメージ及び九州への示唆」，戴二彪編『九州アジア観光戦略特区』の魅力と課題』（ICSEAD調査報告書11-03）公益財団法人国際東アジア研究センター，pp. 42～65
- 兪彭年（2002）「長崎と中国いろいろ」『長崎文化』第60号，pp. 36～46